

現在の若い者などからはむしろ奇異にも感じられる。

あみ笠は、春のくろ切り、田うない頃から田植の早乙女姿までの、野良の美装としても若い娘たちの服装としては目立ち、現在も失われてはいない。

中味の服装の急激な変化につれて、雪国の冬の防寒具も、古いものは殆ど失われようとしている。毛布を二つ折りにしたかくまきは、まだ完全には失われていない。吹雪の道などでは最も適するものかも知れない。しかし頭にかむるおこそ、或はおこそ頭布の類はあまり見かけなくなっている。男は洋服になって、オーバを着、和服の上につけるトンビとか、二重廻しなどの防寒具は若い者からは殆ど失われかけている。基本としては男・女ともに洋装の普及が、かむりもの、はきもの、防寒具などを一変してきており、材料の方からみても、ゴム、ビニールなどの普及が、このような変化をもたらしているものと思われる。

4、機織りと染料 第二次世界大戦の半ば過ぎから、戦後しばらくの間、純綿・純米などの言葉が流行し、むしろ、まじりけ、かての含まれるのが常態になって、この辺の農家でも、ぼつぼつ綿を植えて、綿打ち屋にやっで、くだぬきにし、機を織る風景が見受けられた。これは全く衣類に窮乏した結果の自給現象であったが、明治の半ば頃まで、実は綿も作り、老婆などが糸をつむいでいた。この頃まで、機織りは、嫁入り前の、一人前の当然の修業のようにさえ考えられていた。くだぬき綿が市販されるようになって、綿作りは衰えたが、まだ布団綿などとして栽培する家があった。まだはたしとよぶ機織機械は、破却しないでそのままか、解体して保存している家がある。そして、時折、老婆がぼろ布をさいたり、毛糸などをよって、女の野良帯の類や、こたつがけの類を織りかねない。これも全く機織りの終末現象として、写真にでも写して記録として保存してみるほかないかも知れない。